

初期「大陸往来」の一瞥（下）

——戦時下上海における現地文学の種々相——

大 橋 毅 彦

一 前景化される現地文学

一九四一（昭和一六）年度上半期の芥川賞を受賞した多田裕計の「長江デルタ」の初出發表は同年三月号の「大陸往来」においてのことであったが、たまたま同誌には現地の文学サークル長江文学会の同人蘇我邦衛による文芸時評で「現地文学の志向と段階」と題する評論も掲載されていた。大政翼賛会が示した「内は民族の精神を振起し、外は大東亜文化の昂揚に努む」という実践要綱を実現することが、「前線と銃後の中間に位する特殊地域」たるここ上海ではさらに一段の喫緊性を持ち出したという前提に立って、「現地」の特殊性を性格とした文学」の現況について論じたものである。

ところで、この「現地」の特殊性を性格とした文学」とは具体的にはどのようなものを指すのだろうか。「現地文学の志向と段階」の書き手はいま目になっているそれは揺籃期から発足期に踏み込んだ段階にあるものに過ぎないと断

っているので、ここでは同じ号に載った「長江デルタ」も含め、便宜的にこの年の終りまでの「大陸往来」に掲載された小説作品まで守備範囲を広げて⁽¹⁾そのことを考えてみようと思う。

手始めに「長江デルタ」から見ていくと、日本から上海に来て間もない主人公の三郎と袁孝明・袁天始姉弟の交わりを描いたこの中編小説は、汪兆銘の新中央政府樹立前後の「文化の大デルタ」とも呼び得る上海・南京・杭州を舞台として、新しい時代の座標軸を求める者たちの思想上の苦悩を荒々しいタッチで彫り上げた作品である。政治上の考えでは彼とは反対の立場にある袁孝明が体現する「人間の思想の權威のためにも、現実が一変したと云つて、直ぐ転向できな」い苦しみの真剣さに接した三郎が、「もう、日支事変は、魂の問題として我々の前に残されてゐる祈りをもつて心と心とを重ねることが必要だ」といった思いを自らの裡に湧き上らせていく人物として造形されているところなどは、同じ作者が「大東亜戦争」の勃発の際に得た感動に突き動かされて書いた『新世界』（一九四三・七、大都書房）に登場する神がかり的な思惟に巻き込まれていく人物像よりも表現としては優位にあると思われるが、おそらくこうした一面も視野に入れてのことであろう、芥川賞選評委員会に出席した横光利一は「やつぱりこれは身を實地に当ててやつていなければこんなものは書けないです」、あるいは「支那の青年なんかに読ませれば、日支の提携というような点で実に貢献する所があるだろうと思う」といった言葉を口にして⁽²⁾いる。

上海という場におればこそ日本内地にいるよりも自分たちの生活がそれと深く関与していることが感得できたり、いままでは知らなかったそのありようを具に見聞する機会を得ていくことのできるもの、——そうした判断のもとに作品の中に取り込まれた「現地」の特殊性」なるものは、さし言え「和平建国」「日支提携」の渦中に巻き込まれる人心ばかりを指すのではない。「長江デルタ」においても三郎と袁孝明の知己となる人物として、ヒトラーの魔手から上海に逃れてきて、第二次上海事変の戦禍の跡生々しいこの街のかたほとりで暮らしているベルツ兄妹が登場して

いるが、この「放浪民族」——中欧から上海に亡命してきたユダヤ避難民の運命に目を向けた作品群をこの時期の「大陸往来」に発表していったのが小泉譲である。同誌一九四〇年一二月号掲載の「少女テレゼ——上海碼頭風景——」、一九四一年六月号掲載「追放者の家」、七月号掲載「追放者の家（続）」がそれにあたるが、小泉はそれらの作品を、彼等避難民の合宿所（ハイム）に自ら直接訪問する⁽³⁾などとして書き上げていった。

事変の終息を見ると同時に始まった、上海を中心とする「中支那」地域の経済的復興開発に関わる動きも、上海の「明朗」化などといった呼び声とセットになって上海居留邦人の関心の的となっていた。一九三八年九月に創立された日支合弁の上海恒産株式会社（華名：上海恒産股份有限公司）が大上海都市計画を定めてそれに着手したことなどはその一つの現れだが、一九四一年一二月号の「大陸往来」に載った佐野清（＝黒木清次⁽⁴⁾）の「新市街日記」と題する短編は、この国策会社が開発した五条ヶ辻の住宅地に引っ越してきた邦人男性の目を通して、かつて市街戦が繰り広げられた土地の光景が面目を一新させていくさまを物語ったものである。虹口の「雑魚寝」のような生活から妻と共に新市街の振興住宅へ越してきた主人公は、この市政府一帯の道路名をどう呼んだらいいのか明快な答えが見つからずに複雑な思いにかられたりしつつも、散歩の途上で出会った白衣の傷病兵と言葉を交わしたことをきっかけとして、いまから暮らし始めるこの土地が「静かに、きびしく（しかも長閑かな風景とともに）祖国や戦争」についての深い感懷を与えてくることを実感していく。

そんな主人公が目を通して遠く見やる「河向こうの櫛比した建物」は、「煙や塵埃のよどんだながれ」にその下層を包まれて蜃気楼のように空に浮いてもいれば、夜になれば「苺をつぶした」ような赤いネオンに彩られて「悪の華」のとき影像に化するのだが、そういえばあの詩集『上海雑草原』（一九四四・一、八雲書林）の著者池田克己の場合も、建設工作に従事する長江三角洲の上に広がる雑草原の間から「彼方はるかに薄靄がかげろひ、夜はネオンが空

を焦がす上海租界」を「不逞々々しい心で眺めや」っていたし、自分たちが掘り返す泥の中に顛倒していくあの衝が「魔都」と呼ばれていることに「腹からの笑ひ⁽⁵⁾」を感じながら詩作にあたっていた。『上海雜草原』の刊行は一九四四年一月であって、いま話題にしている時期よりかなり後になるが、詩集に収録された作品の中には「大陸往来」を初出とするものもあり、たとえば「新市街日記」と同じ一九四一年二月号の同誌に載った「泥土層——上海雜草原——」と題する詩からは、あたり一面糞のようになった泥土の中に埋もれながらそれとの無邪気な格闘を繰り返す苦力とともにあることによって、租界の偉容を誇ってきた上海の歴史が塗り替えられていく現場に自らも立ち会っているという確信をわがものにしていくとするさまが伝わってくるのである。

とは言え、このようにして現実の変革に積極的に関わっていき、それによって自身にとっての意義ある生活を見出していくといったシチュエーションを打ち出すことだけが、「現地」性を捉えたことの証しになるとは言えないだろう。つまり、それとは反対に、コスモポリタンとしての街が次々と投げかけてくる悪夢や災いによってその身をすり減らし、不幸で数奇な運命を辿っていかざるを得なくなる人生も、これまた上海という都市がその内部に数多く抱え込んでいたものではなかったか。ここでは太田克己の「異国に果つ」（『大陸往来』、一九四一・一〇）を挙げておこう。

『支那在留邦人名録第三十一版』（一九四一・九、金風社）に記載されている上海居留民団立上海日本高等女学校教諭太田克己とおそらくは同一人だと思われるこの作家が書いた「異国に果つ」は、上海で暮すようになって三十年にもなる塚本はるといふ五十歳を過ぎた女性を主人公とする短編である。この街に来てまもなく知り合った独逸人男性の跡を追って彼の国に行き、そこで一児を授かりはするものの結局は彼と別れて上海に戻り、幾多の苦労を重ねながらいまでは下宿家の女主人としてそれなりの生計は立つようにはなったものの、ある日脳溢血の発作を起こして倒れてしまう——そこから死を迎えるまでの半年ばかりの彼女の姿を、病床でそうした自身の半生を振り返る彼女の回想

も交えながら描き出している。折にふれて湧き起る、捨ててきたふるさとのある日本に対する愛憎半ばしたアンビバレントな感情、上海事変に遭遇して現地の学校への進学を断たれたためにドイツに留学して工学士になるための勉強に励んでいる、国籍は日本でも日本語の読み書きのできない一人息子のエディと繋がっていたいという必死な思い、永い年月を「ただ自分の力のみ信じ、独りで自分を守ることにのみ汲々として」生きてきた女の胸の底には、こうした葛藤が幾重にも畳み込まれていたことが物語られているのである⁽⁶⁾。

二期待される現地青年像

さて、文学作品が「現地」の特殊性を性格とするといっても、斯様にその内実は様々な傾向に分かたれるものであることを見てきたわけだが、そうした中でもより際立つてくる位相が何だったのかをあえて挙げるなら、それは激しく変転する時局に向き合い己の生き方を決定していく現地の青年の姿が作品制作のモチーフとして頻繁に選ばれていくことであつたと思われる。

現地邦字新聞「大陸新報」の発行元の大陸新報社が一九四一年一月に刊行した『大陸年鑑 昭和十七年版』は、内地のそれとは著しい相違点を有する「青年団」の設立及び「青年運動」の展開が現地上海で見られたことを報告している。すなわち名称は青年団であつても、年齢上の構成から見れば内地の青年団、壮年団の両者を結合一体化したものととして一九四〇年八月に誕生した「上海青年団」が、「本団は国体の本義に則り現地青年の国民的団結力を涵養しその心身を鍛錬すると共に現地に於ける国民組織の中核として大東亜建設の推進力たらしめる」（団則第一章第三条）目標を掲げて、文化部・訓練部・体育部の組織系統の下に多方面にわたって活動を展開、一九四一年一〇月現在においては合計九〇余りの単位青年団を有し総団員数は一万名に達するまでに勢力を伸張させてきていることが報じ

られている⁽⁷⁾。

上海青年団はその活動内容を広く知らしめていくべく機関誌「上海青年」の刊行を始めるが、その第三号（一九四〇・一一・一〇）と第四号（同・一二・一〇）を見ると、「長江デルタ」の作者である多田裕計が、同団の一位であるハミルトン⁽⁸⁾青年団の代表として他の八名の団員とともに東京で開催される大日本青年団主催の興亜青年大会へ派遣されることに決まったことや、現地の大東放送局が毎水曜日夜に放送する「大陸青年の時間」で「立体文化への前進」（この「立体文化」という特異な言葉は、後に刊行された『新世界』においても小説の主人公によって口にされている）と題する講演を行うことが記されている。さらに上海青年団本部幹事として、「文化部」では「詩吟・朗詠・映画・団歌」、「訓練部」では「職場相互視察」、「総務部」では「企画・立案」をそれぞれ担当していることも確かめられる。

上海青年団を中心とする青年運動の動きは、海軍表忠塔建設勤労奉仕の主催⁽⁹⁾、海軍復興部の好意を得ての上海青年館の落成⁽¹⁰⁾、その青年館内での近代日本科学図書館虹口分館の開設⁽¹¹⁾といった話題を提供しながら、団の機関誌のみならず他の新聞・雑誌メディアにおいても頻繁に取り上げられていくことになる。「大陸往来」の場合でそれを確認すると、一九四〇年十一月号に「地域別青年団の組織——上海青年団の拡大強化」と題する告知が掲げられ、翌二月号における「新体制現地人座談会」では当の団体の事務局長である松井松次も出席、上海青年団の現況について熱弁を振るっているという具合だ。一九四一年六月号には美山豊「現地青年問題を論ず——岐路に立つ青年——」と題する評論も載った。そして、こうした状況が広がりを見せていくとき、多田裕計のように自分の生活そのものを問題の渦中に直接投げ込んで行動していくところには踏み込まないにせよ、それと無縁であるとはいえない立場を選択する書き手が現れる可能性は十分すぎるほどあったと思われるのである。

たとえば一九四一年二月号の「大陸往来」に載った二藤二雄の小説「泥岸の詩」が、時期的に見て比較的早い段階

の現地青年運動の動向につながるストーリーを提示している。事変直後の「昭和十二年十二月」の上海に、内地出張の帰途についた自然科学研究所所員の「私」とともに、「私」の友人の弟である千田良平という青年が電気材料商を営む兄の仕事を再度手伝うために戻ってくるからこの物語は始まっていくが、その冒頭部でくだんの良平は、船が上海の港に近づいたことを知った「私」から甲板に出ようと誘われても、「僕、いやです！戦跡はいやなんです。（中略）戦争で破壊されたあとを見るのはたまらない」という言葉を口にし、日本軍の輸送船と擦れ違う時に周囲の人々がこぞって「バンザイ」の声をあげる中、ただ一人船室に閉じこもって「フランスの恋愛小説」に読み耽っている青年として描き出されている。

事変前とは異なる良平の様子に、兄の冬太も「私」も戦争の激しさが彼の内部に自分でも收拾のつかない圧力感をもたらしたがゆえの変貌ではないかと危惧の念を募らせるのだが、そんな良平にある日転機が訪れる。その日上海に着いてから初めての「私」の訪問を受けたものの「私」との対話を拒否して街へ飛び出した良平は、必死になって逃げ惑っているうちに閘北の一郭にある戦場で破壊された鉄路管理局に辿りつく。そして、良平に追いついた「私」がその戦跡から「硝煙の匂ひ」より「何かもつと尊い世界の、鋭く胸をうつ匂ひが吹きつけてくる」を感じた時、良平もまたやおら爆弾でできた穴のふちを「彼の心の中にどろどろ流れてゐる邪念」を吐き出すかのような声を上げながら歩き始め、兄とともにこの「泥岸の街」で店の再建に乗り出す決意を固める。やがて彼が、戦乱後の「変態的な殷賑さ」で「汚辱な感じ」をとみに増加させた虹口の日本人街を再生させるため、「共和里自警青年会」の良き指導者としての風貌を持ち出したのは、それからほとんど間をおかないその年の暮、大晦日を迎える頃だった。上海青年団の前身にあたり、現地自肅運動の一翼を担う上海青年倶楽部が結成されたのは一九三九年二月のことだったが、「泥岸の詩」はそうした運動体の萌芽的形態を捉えているとも言えよう。

目次では「現地創作」と銘打たれた「泥岸の詩」とは別建てで同じ号に掲載された大木雷作¹²⁾の小説「光ある濁流」の方は、事変後二年が経過した上海で中国経済の再建という問題に取り組むための研究会を立ち上げた青年佐川と、彼を後援する貿易商杉本龍造に実の両親の死後引き取られていまは娘同然のようにして龍造夫婦とともに暮らしている時子という二十歳少し過ぎの娘が主人公である。時子の眼に映る佐川青年の人となりは、「軽薄で、ニヒルな上海の青年たち」の中にあつてひととき「真実味のある、熱の塊りの様」なものであり、それを自ら証明するかのようには佐川は「建設的なものへの意欲」を全身に漲らせながら行動していく。その過程においては、自身の尊敬する中国人の経済学研究者から会への参加を断られて「日支提携」遂行に難儀することもあれば、同じ会のメンバーであっても佐川の経験知に富む発言を快く思わず、「老上海／新上海」という党派的な考えを押し出してくる小林青年らによつて孤立に追いやりられたりもする。が、それらをもつても佐川の闘志は怯むことがない。彼との世代的な違いがもたらす「自由主義の動脈硬化病」に罹っていることを自覚する龍三から自分たちに代わる時代の担い手となることを期待されつつ、佐川は「世間並みの平和」よりも「現地新体制」の礎となる生き方を選ぶ決意をいっそう強くしていくのである。

ついでに言えば、そんな佐川とともに生きることを自分にとつての幸福に通じると確信していく時子の印象が「健康美」といった言葉で語られ、それをもつて「断じて現地娘ぢやない」ことの徴とされていることから、これまでの「享樂的利那的」な生活スタイルや精神性とは異なつて、今日唯今からの上海を支える新たな現地青年の一翼を占める日本人女性について期待されるイメージが、そうした符牒をもつて流通し始めていることも読み取れるのだ。

現にこの「健康美」は「大陸往来」一九四一年五月号掲載の国見由紀夫の小説「建設」にも出てくる。前年一月号の同誌に「技術、技巧の未完成はあるが、筆者の大陸を見る愛情はこの一篇に溢れて居る」という「編輯局」から

のお墨付きをもらって「春妹」を載せたのに次いで、「兵隊出身」のこの作家がその後の精進振りを示すべく発表したのがこの作だが、そこにも「光ある濁流」の時子と同じく——いや、その描写の細部に至るまで剽窃と見紛うばかりの重なり方⁽¹³⁾で——「健康美」を湛えた冬子という女性が登場する。そして上海の開発会社にタイピストとして勤める彼女が心を傾けていく、現地除隊後上海特務機関に在るかつての上司の命を受けてこの会社に向向、奥地の鉱山との間に無線網を構築する任に就いた村田青年もまた、「開発の命脈」を守るために「捨て身」の行動に打って出んとする青年として造形されている。建設と統制とが結びついた時代の要請を前にして、自分自身の幸福や個性の自由な発展にしか人生の価値を見出さないことを若さの欠陥だとみなす発想を身につけた二人は、そうした「幸福」や「自由」を犠牲にすることにおいて初めて結びついていくとする。「若い感情を妙に掻き乱」し「身を破滅に近づけ」といった「上海病」を向うにまわしたこの二人の姿に、作者は村田が畏敬する吉川少佐の口を借りて現地に生きる青年の方向を見定めている。

三 現地文学に差し込む室生犀星の影

以上、現地青年の行く末にスポットをあてた小説を一九四一年上半期の「大陸往来」から三編取り上げてみたが、自警青年会、経済研究会、開発会社における無線開設と個々の活動の場は違っていても、彼らの行動の指針となるものが総じて自身の私生活を叩き上げ、建設実践への道を邁進しようとする熱意によって支えられていること、そしてそのような青年を描き出すことが当の書き手たちにとっては、自らの文学を挙げていわゆる翼賛運動に協力することの証しとして受けとめられていたことが判然としてくるのである。

だが、このようなかたちで生み出される健全な文学なるものは、新体制に即応することを第一義的なものと考え

書き手の意識を優先させるがために、現実の後を追いかけていくだけか、予め定められたコース以外の道を作中人物に歩ませる可能性を失っていくものになっていくかして、かえって文学としての衰弱を呼び込んでいったのではないか。

たとえば「光ある濁流」の場合、たしかにそこでは「私なども中国人としての自覚はハッキリしてゐますが、実際に民族を超越した大東亜の民としての実感も確信も掴むことは出来ません」という言葉によつて佐川青年をはたと立ち止まらせる中国人が登場したり、その佐川も自分の関わっている研究会は「軍部とは何の關係もありません」などと言ひ放つたりして、作中人物の生きる空間がけつして均質なものではなく、幾つかのベクトルを違えた力線によつて成り立っていることも肯定できる。だが翻つて事変前から事変後にかけての佐川の変化の仕方に目を向けた時、仏蘭西租界の一郭で「周囲の生活から浮び上がつた」「エトランゼ」のそれと言つてもよい「孤独の生活」を送つていた彼が、なぜ唯今現在にあつては「竹を割つた様な性格と物に対する進る様な熱」でもつて龍造一家を魅了してしまふ人物に成りきることができているのか、その必然性や成長（？）の過程がほとんど伝わつてこず、ためにこの人物が人間らしくは見えてこなくなつてくるのである。それはやはりこの作品を読んだ際の芸術的感興を殺ぐ一つの瑕疵であると言わざるを得ない。

さて新たな問題に移ろう。小論のはじめに記した文芸時評「現地文学の志向と段階」は最近の収穫として小泉譲の「少女テレーゼ——上海碼頭風景——」を挙げている。傍題が示唆するように、外国からの船が入りする波止場に日々足を運び、自分のあとを追つてウイーンから「パパとママ」がやつて来ることを心待ちにしている八歳のユダヤ少女テレーゼを登場させるところから始まるこの小説は、彼女の裡に生じるさまざまな感情の起伏と、彼女の若い叔母で二人の生計を支えるため身を粉にして働くアンナがそんな中で初めて知つた恋の歎びとを交錯させながら、ようや

く彼女の目の前に現れた父母を乗せた船が、ユダヤ人上陸禁止の命令のためにそのまま上海碼頭から離れて行くのをテレーゼが見送るまでを物語ったものだが、評者はそうした「上海の碼頭にはザラに転がってゐる」「素材」をよくこなして「作品」にした作者の手腕を高く評価している。

なるほどそのように評価される作者の「手慣れた筆致」なるものは、「はじめて、アルフレッド（アンナの恋人となるユダヤ人の青年医師。注大橋）が、テレーゼの部屋に來たのは、夏の終り頃だつた。それも秋へ移る前ぶれなのか、霧の深いひやりとした夜だつた。薄煙りのやうな霧が、びつくりする程秋の匂ひを含んで、あたりを立罩めてゐた。ポプラの樹の下に、しよんぼり立つてゐる外燈も、慌てた色彩でほんやりと輪を描いてゐた」のように、人物の内面の動きをそのままのかたちで説明せずとも、彼らを取り巻く風景の描写によつてそれを感じさせていくところだとか、あるいは作品の構成としては二部形式をとっている。それぞれの冒頭に、テレーゼの境遇をそれに集約した感がある「七月の空にも、暗い歎歎あるを。」ならびに「その秋、孤独は流河と共に逝く」といった詩的感興を湧かせる小見出しを置いているところなどに、うかがうことができる。

一方、この小説に対する評者の注文が無いわけではない。その最たるものが、物語の最後に至つてテレーゼの心が絶望に覆われていくのを目して、そのような結末のつけ方には「現地文化の建設に逆行する働き」を持った、あるいはそうした傾向に紛れそうな作者の志向が現れているのではないかという危惧の念を表明している点である。この危惧を反転させれば、建設への意欲や健康美に溢れた青年像の造形を通して現地文化の興隆に寄与する行動派としての作家に対する称讃になることは見易い道理だが、そのことはもう繰り返さない。

むしろそれとは別に注目したいのは、作者の慣れた筆捌きもたらす「詩感」が単なる「言葉の美しさ」の域を越えて「真実の輝き」を顕していくために、たとえばどのような作品を目標（手本）に据えたらよいのかという問いに

対して、この文芸時評の書き手が室生犀星の作品を持ち出してきていることである。

かつて詩集『抒情小曲集』（一九一八・九、感情詩社）や第一創作集『性に眼覚める頃』（一九二〇・一、新潮社）をもつて大正詩壇と文壇とに新風を送り込んだ室生犀星の一九四〇年から四一年にかけての創作活動と言えば、いわゆる〈王朝もの〉と呼ばれる小説を多く執筆発表する時期にあたっているが、「現地文学の志向と段階」の筆者である蘇我が「少女テレーゼ」の作者が見ならうべきだとして持ち出したのは、それよりやや遡った時点でこちらの方はいわゆる〈市井鬼もの〉と呼ばれる作品の量産態勢に入る直前に書かれた「医王山」（改造、一九三四・七）だった。市井に逼塞して暮らす一地方官吏の人生に触れたこの短編を蘇我は取り上げ、それが「詩人犀星が最も詩才を沈めて書きあげたかの様に見え」ながら「最も強く『詩』を感じ」させると述べる。換言すれば、「美しい描写を含まずに、平凡な文が真を衝き、全体的に交響し合つて詩感を盛り上げる」ケースとしてこの短編の出来栄を褒めているわけだ。

このような犀星評が評者一人のものでなかったことは、「医王山」発表時に遡って同時代評を見ても確かめることができる。一九三四年六月号ならびに七月号の「行動」に「文芸時評」を寄せた阿部知二は、犀星の「洞庭記」（『中央公論』、一九三四・五）や「獵人⁽⁴⁾」（『行動』一九三四・六）を取り上げて、「いくつかの挿話は組曲のやうな配置を持つてゐ」たり、「俗悪なものの上には淨らかな光り」が投げかけられているところを買っており、続く同誌八月号の座談会「月評と文芸思潮⁽⁵⁾」に出席した折には、そうした犀星文学の特性が他でも發揮された例として「医王山」を持ち出し、「ちよつと饒舌に過ぎるやうなところもある」が「あれはちよつと行くとサチールみたいに——僕はゴリーを沢山読んでないけれども——さういふことになつて面白いと思つた」と発言している。このようにすでに文壇においては認められていた犀星の作品カラーが、上海における現地文学のありかたを問題にする言説の中に顔を覗か

せるのは、少しばかり意外で新鮮な気がする。

そんな感想を抱いて周囲を見回すと、ひょっとするとここには犀星の影が差しているかもしれないと思わせるような作品に出くわした。一九四〇年十一月号の「大陸往来」に掲載されている黒木清次の「ながれ」である。同じ号に載っている「秋ふかし 蘇州だより」で、「蘇州文学」の創刊に関わりつつあること、近く成立するはずの中日文化協会蘇州分会の会員になる予定であることを自らのプロフィールとして記している黒木が書いたこの短編小説は蘇州を舞台とし、事変後一年目にこの街の金融公司に赴任してきた矢山と、城内の百貨店に勤める雲珍との間に生じた愛情のゆくえを追う作品である。

本文中にもその映画タイトルを持ち出しているところがあるのだが、この年の夏に上海で上映され¹⁶、その中のハイレイトシーンの一つとして蘇州のクリーク沿いの草原で「日本の船員と美しい支那娘」が「楽しさうに語り合つてゐる」場面が挿入されていた、あの長谷川一夫・李香蘭が共演した映画「支那の夜」が歌い上げるようなラブストーリーが、自分たちの間にあっては現実のものとはなっていないことをどちらからともなく察し合い、二人の心が静かな悲しみで満たされていくさまを描き出そうとしたのがこの小説だが、その中には輪禍に遭つて入院している雲珍とそれを見舞つた矢山とが病院の中庭で次のような言葉を交わす一節が挿しはさまれていた。

夕暮時で木屋の花特有の霧のやうにひろがつてむせてくる匂がそのあたりにこめてゐた。

「い、匂だね」

(中略)

「でもワタシ木屋の匂は哀しい……」といつてしばらくして余りにもいゝ匂^マ

「あまりにも美しいものも哀しいね、そしてまた美しからざれば哀しからんに……雲珍はむつかしい」

「え？イマ一度美し……カラ……ザ・レ・バ……？」

「哀しからんに……あなたは美しい——だから哀しんではいけない」

雲珍の清らかな美しさを称え彼女を愛しむ思いを伝えていくための前置きのようにして矢山の口から発せられるのが「美しからざれば哀しからんに」なのだが、実はこれと同じ言葉が題名となつて、「ながれ」より半年前の内地で刊行されていた「日本評論」一九四〇年四月号に発表されていた短編小説が、犀星の「美しからざれば悲しからんに」なのだ。「哀」と「悲」の違いはあるが、その二か月後にこの小説を「雛の日」と改題して他の作品とともに単行本に収録して刊行する際に書名の方は『美しからざれば哀しからんに』（一九四〇・六、実業之日本社）とやはり「哀」の文字の方が選ばれるに至つた犀星の「美しからざれば悲しからんに」は、「一・雁子（かりこ）」、「二・雛の日」、「三・渡し舟」の三つの挿話から成っている。洋裁の内職をして都会で一人暮らしをしている雁子を中心に、彼女と親しくしている榊木と作家の野木との三人の間に不思議な友情が交わされていくこと、脳溢血に罹患した妻の予後の生活に付き添う野木の心に、彼女に対する愛情と哀憐が以前にもまして去来するようになったこと、突然の咯血に襲われ死んでしまった雁子の郷里に赴いた野木と榊木が、そこに広がる縹渺とした景色の中に雁子のすべてを感じとっていくことが、いま挙げた三つのパートでそれぞれ語られた小説である。したがって物語の内容からすれば「ながれ」と重なるものではない。けれども、これらの出来事が挿話風に綴り合わされながら、全体としては無惨で悲痛なことが溢れかえっているこの人生や世間の中で、いじらしくも美しいものの命に寄り添おうとする感情の高まりを伝えてくる点に依拠するならば、この小説が伝えてくるそのような「詩感」に共鳴した黒木清次という作家が、そうした思いを逆説的に言い表している「美しからざれば哀しからんに」という題名に目をつけて、自分の作品に登

場させた人物にそれを口ずさませるといふ可能性は十分にあり得る。

「大陸往来」から少し離れるけれども、この推測を補完し得る現地作家と犀星との関わりを告げるさらに確かな事例がある。「現地文学の志向と段階」中でも紹介されていた現地唯一の邦人文学団体たる長江文学会は、一九四一年に入るとその活動の場を「大陸新報」紙上の「土曜文藝」欄から会の機関誌「長江文学」に移しつつあった。月刊現地総合雑誌「大陸往来」に比すれば現地文学活動にコミットする割合が格段に高い、しかし創刊号も含めてそれ以降のものほとんど見ることができないこの「長江文学」の中で、現在実物を手にすることがそれのみ可能な第二巻第二号（通算第五冊、一九四二・五）に掲載された小濱千代子⁽⁸⁾の小説「黄塵」が、すなわちここで取り上げてみたい作品なのだ。

「黄塵」は、結婚して夫の勤務地である上海での暮しを始めた途端、想像だにしていなかった俗悪な人間世界のごたごたに巻き込まれてしまった女主人公の昌子が、その中で自分の生きる道を模索していく姿を描いている。すなわち、彼女との婚約前に街の酒樓で知り合った姑娘との関係を清算しきれないでいる夫と相手の女性や、彼とは親戚に近い関係にあつて、寡婦の生活の気易さや下宿屋を営んでいるという商売柄もあつてか、色々な連中を自分の部屋に出入りさせては欲得ずくの付き合いを優先させている年増の莫連女の間に挟まれながら、何とかして自分の精神の生き延びる場所を求めていこうとする昌子なのだが、そんな彼女が彼らのまき散らす無知の身勝手さや俗悪な空気から少しでも離れていたいと思つて、二三日前に買つて来た新刊の雑誌を開くくどりがあつた。そしてそこに載つていて、彼女の目を惹きつけていつた物語が、間違いなく室生犀星の書いた小説を指しているのである。「黄塵」の本文ではこの物語の内容をどのように説明しているか、以下に引用してみよう。

それは美しい物語であつた。題材を平安の都に採つて、其処に住む雅びやかな一対の男女が、偶然三たびもめぐり合つてお互に相手を想つてゐながら、男は女の住処を知るべき時に教へて貰へなかつた為に、女は自分の中にある掟を破つて迄誇を捨てたくなかつたために、とうとう最后迄生涯を共にする生活に入れなかつた、といふ筋に、昌子の好きな、詩人から身を起したその作者は彼自身の匂ひ高い夢を托してゐた。陽炎の燃える荒れた庭の摘草や、うらぶれた砂丘に立つ寺の風景などを繞つて、連れ合ひ解きほごされる心理の絵巻は、巨匠の絢爛とした文字の選択の上に繰り展げられてゐた。

このように要約された作品が、「西の京五条あたりの築地も崩れた庭」の中で「暖かい猫の目のやうな春の日ざし」を受けて摘草に興じる女初瀬と、「山吹色の狩衣に立烏帽子」の「顔の照りは一きは著しいものがあ」る若人（のちの「大和ノ国ノ守」）との出会いから始まる犀星の小説で、「黄塵」の二ヶ月前の「中央公論」一九四二年三月号に掲載された「えにしあらば」であることは言うをまたない⁽⁹⁾。そして昌子が感じとる「詩人から身を起したその作者」がこの小説に托した「匂ひ高い夢」の証しは、今度は「えにしあらば」の本文中にそれを求めるなら、たとえば初瀬と大和の間に交わされる次のような対話によつて伝わつてこよう。

「まこと三たびもえにしがあり申したに、我らのえにしいつもえにしにすらならずに終り、大和口惜しくぞんじ申す。」

「わらははただ清き思ひを抱き生きたうございます。」

初瀬の頭は垂れ、長いくろがみだけが大和の眼に漆のやうにけぶつて見えた。えにしはもう結ばれさうなところで、いつも美事に酷たらしく逸れてゐた。

「よく申された。清きおもひといふ空蟬のやうな言葉にすら我らはしつかり繋がつて居り申したい、これは永く生きるためのはなむけのやうなものでせうか。」

「御一緒にお従さいたしましてこれほどの清さにとどくことは出来ませぬ。」

こうした物語と出会うことによって昌子の裡で「目覚めた感性」は、「その鋭さを恃にして知性に呼びかけ」はじめ、「大陸の黄塵」のなかで「毅然として生き抜いて行くこと」に向けて彼女は「一筋の情熱を燃やしはじめてゐく」。

ところでこのようにして自立していく昌子の姿を描くことに主題が置かれていると見なす木田隆文は、「黄塵」という小説がそれゆえに現地総力報国運動とは一線を劃し、さらにいえば翼賛文化体制に背信する向きを持っていたという見解を提出している⁽²⁰⁾。だが、はたしてそうであろうか。なるほど昌子の夫に付きまとう姑娘は、作中ではその放恣な姿を露わにするがゆえに昌子の引き立て役になっているにすぎず、その意味でこの女性を登場させたのは、日華提携を推進するために両国人の接触面を正しく捉える必要があるという現地的課題にこの作品も即していることを「偽装」するためであつたとは言えるかもしれない。だが、昌子の自立とはいかなるものであつたか。再び「黄塵」に戻ると、そこでは、先の引用の直後に次のような叙述が続く。

かういふ美しさは、只それに陶醉するだけに止まるならば、それを此の時代の厳しさからの逃避といふ人は、或はあるだらう。けれども又一面では、その美さが類ひ稀な日本的なものであるだけに、それをより逞しい意欲へ跳躍する土台にするといふ意味で、その精神の在り處は否定出来ない位置を占めるものとも云へるのに違ひなかつた。

自分が読んだ物語を手本として昌子が得ていく精神的な自立は、「その美さが類ひ稀な日本的なものであり、」より逞しい意欲へ跳躍する土台」となり得る点において、翼賛への協力や挺身を呼びかける時代の要請にやはり応えるものとなっている。それはちょうど前節で取り上げた「健康美」を携えた日本の娘たちが上海に存在することが国威の発揚に役買つて出ることと、同じ役割を果たすものであると言えるよう。黒木清次の「ながれ」ではそこまでの傾

向は現れていないが、小濱の作品になると犀星の描いた丈高い女人像は、「高い誇に生きようとする物語の女の気持を貫いてゐる日本的なものは、今の自分にも一筋の繋りを持つてゐる」ものとして女主人公によって受けとめられ、貞淑さを武器にしていくさを戦う女の範疇に組み込まれていくのである⁽²¹⁾。

四 上海に渡った女たちが語り得たもの

このように犀星の〈王朝もの〉に流れる情感の美しさまでもが「類ひ稀な日本的なもの」に結びつけられて現地文学の翼賛態勢が整えられていく時、そういう潮流から一定の距離をとった言説活動は、どのような場でどんな風にしてその存在感を保ち、かつ伝えていくのか。むろん、すでに見たようにユダヤ人少女の運命に翻弄される姿を描いた小泉譲の小説や、〈明朗上海〉の裏面に巢食う何人もの邦人を登場させて「現地文学の志向と段階」の書き手から問題視されていく中島徳之助の小説「枯草のある景色」〈大陸往来〉、一九四一・二などもその事例として挙げられる——だが、前者の小泉とても、一九四三年に発足した上海文学研究会に参加していく頃には翼賛文学を先導する役を買って出るように変貌している——が、そうした「現地創作」群とは誌面構成の面では別扱いとなつてゐる邦人女性たちの寄せた身辺雑記風の作品の中にもこの手の傾向は流れ込んでゐるのである。

その一つとして挙げたいのが一九四一年二月号の「大陸往来」に載つた室伏クララの「宣伝部の一室」である。この月の特輯として同誌が組んだ「現地生活ルポルタージュ」の筆頭にくる⁽²²⁾のにふさわしく、「宣伝部の一室」は南京国民政府宣伝部の国際問題研究室に勤め出して一ヶ月経つた筆者が、そこで出会つた「支那のインテリ」や「非常に優秀な邦人」がその立居振舞いをもつて示してくる「建設的な感じ」に対する信頼感を厚くし、「積極的」に「新しい東亜の支柱となる様な気持」に至つたことを報告してゐる。

だがそれとともにこの一文には、東京にいた時にもよくそうなったように「私」がここでも「ふつとさびしくなること」、この「ふつとしたさびしさには本当に弱つてしまふ」こと、そして上海でも南京でもない「もつと支那的な、しいんとした田舎の町へ行きたいなとは思」うといったようなことも書きつけられている。前者の叙述のトーンが、たしかにそれが本音でないことはなくても、それと同時に編輯局の狙いに沿うような言葉も書いておこうという心の働きによって少しでも支えられているとしたなら、こちらの方ではそうしたリップサービスや構えとはより無縁なところにあつて筆者の精神の内核を形作っている、何かやわらかくて繊細なものがその姿をのぞかせているのではないか。そして、こうしたやわらかな目と心で「私」が外界に接していく場面として、洋車に乗って家と職場との間を行き来する箇所も挙げられるのだが、そこに記されている「——こんなにも空の広い、星のきら／＼と、暗い中になだらかな丘陵の線、月を浮べた水。——洋車の上で吹かれる風はピン／＼と冷たい、吐く息は真白い」といった風景イメージとそれに接した感動とを突き詰めていくなら、やがてそこからは大東亜共栄の幻影に踊らされる男たちの詩編群の中にあつて、唯一それとは異なる詩的位相を示している「繁星の下——南京広州路——」（「亜細亜」創刊号、一九四四・七）と題する、彼女の書いた詩が現れてくるのである²³。だがこの詩が発表されるにはまだ三年以上待たねばならなかったし、そして戦局が激しく変転する中でのそこまでの時間の経過は室伏クララの文学者としての短い生涯の上に幾重もの光と影とを投げ与えていくのである。

一九四〇年から上海に在留し、一九四一年五月号の「大陸往来」の扉には絵も寄せている新制作派の閨秀画家村尾純子の随筆「私の眺め」（「大陸往来」、一九四一・六）にも触れておこう。まずはタイトル自体が注目する。いかにも〈私〉という存在が前景化された感を与えるタイトルだが、その内実は一に画家としてのまなざしの在り方にかかっている。具体的に言うと、どうやら病院に入院しているらしい「私」が目に入れる窓の向うの風景は、「屋根」と

「空」と「くつついた様に並んでゐる家の窓」と「物干台」といった何の変哲もないもののだが、その中に現れて縄跳びをする女の子のセーターの袖口と衿に入った「赤い毛糸」の線が「青い朝の空」に鮮やかで、「声をあげたい程うれし」になったことが書きとめられている。このように「私」の「窓」からの「たつた一つの眺め」が「有名な建物の一つ一つ」よりもなつかしく思えてくる感情——それは「けふの日曜もたうとう部屋にこもつたきりですごした——そんなことをかんがへるともなくかんがへながら、わたくしはだまつて四角い夜の窓とむきあつてゐた」という一文をもつて始まり、窓の外に広がる風景にたいする感動と、その反照のように自らの裡に蘇ってきて悲しみを新たにさせていく思い出との間を揺れ動いて行く「私」の姿を書きとどめた室伏クララの随筆「上海にて（上）（下）」（『大陸新報』、一九四二・二・二三、二三）に受け継がれていくとも言えよう。

その後、室伏クララと村尾絢子兩人は、それぞれ海軍が出していた中国語総合雑誌「新世紀」の編集長に抜擢される²⁴なり、阿部知二とともに従軍女流画家として「中支」前線に派遣される²⁵などして、大状況の渦の中に巻き込まれていく。個の感情などとのに足りないものとして一気に押し流していく、そうした事態に足を踏み入れかけた時点で彼女らがどのようにして「私」性をとどめた言説を残していたかを見てきたわけだが、同様の心のありようを示したもう一人の女人の言説を「大陸往来」以外からも紹介したい。

彼女の名は富岡冬野。京都室町にて生い立つ。祖父はあの富岡鉄斎翁。竹柏会に所属した歌人で「心の花」同人——こうした経歴を持つ女性をここで取り上げるのは他でもない、彼女の夫の松崎啓次が第二次上海事変後の上海で映画を通じて日本の対中国文化工作に深く関与した人物であり、彼とともに短期間ではあったが、彼女もまた上海に滞留したからである。中華電影設立の前後から彼と親しく行き来していた映画製作者の劉呐鵬（劉燦波）がテロの凶弾に撃れた時（一九四〇・九・三）に松崎が現場に居合わせ、劉の死を看取ったことはあまりに有名な話だ。だがいまはそ

れよりも、そうした文化統治に絡んでも様々な陣営が放つ間諜やテロリストが蠢く上海で生じた大きな事件に先立って、一九四〇年の春に急な病を得て没した冬野がこの街で見たものは何だったのかを考えてみたい。時期的にはここまで取り上げてきた対象よりも少し遡ることになるが、彼女の目もまた、新東亜の夢を追うのに狂奔する男たちの目が捉えられなかったものに注がれているのではないか。

さてそれは「上海の子供達」と題する随筆作品である。冬野の遺稿集『歌文集 空は青し』（一九四一・五、第一書房）に収録されており、作品末尾には「昭和十四年七月」と執筆年月の記載がある。話の内容はその一年前の一夏を滬西のジェスフィールドにある公館で夫とともに過ごした時、そこで知り合った同じ敷地内に住む二組の台湾生まれの中国人家族のことが中心に据えられている。この二組の家族はそれぞれ「R家」「H家」と表記されているが、このうち「R家」が劉呐鷗一家を指していることはほぼ確実である⁸⁶⁾。

だがそうした事実の発見よりさらに興味深いのは、自分の子供を育てていくに際して言葉の障害を家庭の内にも外にも抱え込んでしまった両家の夫人たちの悩みやとまどいを、「私」がわがことのようにして受けとめていることである。

すなわち、「お父さん」が同文書院に勤めている⁸⁷⁾「H家の総領息子の七つになる正ちゃんだけは、日本語も上海語も同じ位に話すけれど、その妹のエンちゃんは日本語は十言位で台湾語だけ」、そしてまた「R家の矢張総領息子のアシは南京語と広東語と上海語、その妹のアトは広東語だけしか話せ」ず、仮にアトとエンちゃんが遊ぶにしても、それを見ている正ちゃんの言葉を借りれば「お話はできないんだよ。同じ言葉を知らない。アトがウエイ（上海語の俗語で「もしもし」というような意味。注大橋）と云つてエンちゃんがウエイと云ふとそれでおしまい」の光景がそこには現出している。では子供達の母親はどうかというと、台湾の豪家に生まれて育った後、R氏と結婚して一時東

京に住んだことはあっても片言の日本語しか話せないR夫人は、自分の子どもを「パパのR氏の様に日本語が上手になる様にしたいのだが、日本語が一言も分らぬ子を日本人の学校に入れる訳にも行か」ずに思い屈しており、一方の台湾の日本女学校を出たH夫人もまた、子供のことで心をくだいているとともに、彼女自身は仕事を怠けた子守の少女を折檻するときには「野蠻」ともいえるくらいに激しく感情を剥き出しにするのに、庭先に咲く鳳仙花を手に取りながら「あら、これ八重ね」といった言葉を口にして日本語の機微に長けている一面を垣間見せる。そして彼女のそんな複雑な姿に接した「私」は、「ふと夫人は物を考へる時も日本語で考へるのかしらと思つて、何だかぞつとする様な気がし」て、「夫人が気の毒に思はれてならな」くなるのだ。

ここには、宗主国の文化統治の一翼を占める言語教育の広がりの中に巻き込まれ、台湾から東京（あるいは台湾の中の「日本」女学校）、そして上海へ、という移動を通じて自らの拠るべき民族的アイデンティティからはかけ離れた地点に追いやられてその精神が四分五裂の状態になっている人々の立場に、いくらかでも寄り添おうとしている書き手の姿勢がある。歌人であるがゆえに、言葉というものが人間を生かしもすれば殺しもすることを知っている筆者は、そのプラスの面をとれば人間のコミュニケーションツールとして役立つべきはずの言葉が、このように民族や政治のはざまにあつてそれとは違った人間悲劇を惹起してくることを日常の中に見据えていつているのである。

遺稿集の中には「雲白く街うらぶれて上海語悪夢のごとく鳴りひびくなり」という歌も収められている。おそらくは上海到着後ほどなくして得た感興をもとにして作られたものだろう。ここには街の人波の中から押し寄せてくる「上海語」に対する異和が表明されている。その裏側には「悪夢のごとく鳴りひびく」「上海語」とは違って雅やかな響きを持つ日本語への郷愁や自負が潜んでいるかもしれない。だが、その時点で歌の作者が抱いた異和は表層的に感得されたもの——換言すれば「悪夢のごとく鳴りひびく」「上海語」とは風物詩的に認識されたもの——にすぎ

ず、この街で暮らすある種の人々の生にとっては、言葉をめぐる異和はもつと内攻するかたちをとって存在し、そこにある秩序を攪乱しているのではないか。そうした気づきが示されているものとして富岡冬野の随筆「上海の子供達」は受けとめられると思う。

注(1) 国立国会図書館ならびに中国国家図書館（北京）が所蔵していて現時点で管見し得る一九四〇年から四一年にかけての

「大陸往来」は、第一巻七号（一九四〇・一〇）、八号（同・一二）、九号（同・一二）、第二巻一号（一九四一・一）、二号（同・一二）、三号（同・三）、四号（同・四）、五号（同・五）、六号（同・六）、七号（同・七）、八号（同・八）、九号（同・九）、一〇号（同・一〇）、一二号（同・一二）の一四冊である。このうち今回の論考で主として取り上げるものは、一九四〇年一一、一二月号、一九四一年二、三、五、一〇、一二月号の七冊である。

(2) テキストとしては『芥川賞全集』第三巻（一九八二・四、文藝春秋）を用いた。

(3) 「上海通信」追放者の街―ユダヤ人避難民収容所を観る」と題する小泉の書いた訪問記が「燕京文学」8号（一九四一・五）に掲載されている。

(4) 「佐野清」が黒木清次の筆名であることについては、一九四二年一二月号の「大陸往来」掲載の「現地の三大詩人」（無署名）がで言及している。

(5) この一文中で「」を付した語句は『上海雑草原』の「後書」から引用したものである。

(6) 「異国に果つ」の作者太田克己は、戦後、新生社から発行された雑誌「花」の一九四八年五月号に「思ひ悩める夜々々」を発表している「太田克己」とおそらく同じ人物だろう。この小説もまた日中の軍事衝突が起きて間もない頃の上海を舞台とし、「赤い紙」により自身の未来の断たれることに不安を覚えながらアパートで暮らしている日本人の青年が、彼の部屋の真上に住む地元の女学校で英語教師をしている日本人女性に対して「情欲」と紛うばかりの愛情を感じ始める経緯が粘着感の強い文体でもって叙述されている。なお、作品の末尾には「第一章終り」の記載があるが、続篇にあたるものは未見。

(7) ただし団としての活動期間は短い。『大陸年鑑 昭和十八年版』（一九四二・一一、大陸新報社）や団の機関誌「上海青

年」最終号（発行年月の記載はないが、掲載記事内容から一九四二年一月一日以降の発行と推定できる。注大橋）の記述に拠れば、一九四二年になると上海総力報国会が結成されたり、総軍兵事部から現地郷軍の訓練強化のため青年団員中において在郷軍人会員である者は逐次脱団させるように総領事館に対して依頼があるなどの状況の変化が生じ、その結果同年九月に上海青年団はいわゆる発展的解消を遂げた。

- (8) 「ハミルトン」はハミルトン・ハウス（漢瀾登大廈）のこと。江西路と福州路の交差点に工部局ならびにメトロポールホテルと向き合つて建つこのビルの上階には多田の勤める中華映画株式会社（中華電影）があつた。『昭和十六年八月青年館落成記念 上海青年団の現状』（上海青年団）に掲載された「上海青年団構成単位青年団名称」によれば、ハミルトン青年団の所在地は漢瀾登大廈三階、团长多田裕計、団員数二〇と記されている。

- (9) 「上海青年」第三号（一九四〇・一一・一〇）で報告。

- (10) 『昭和十六年八月青年館落成記念 上海青年団の現状』掲載の「上海青年館の建設」。

- (11) 『昭和十六年八月青年館落成記念 上海青年団の現状』、「上海青年」最終号。

- (12) この作者名を「大陸往来」は目次・本文ともに「大木雷作」と表記しているが、木田隆文「長江文学会「土曜文芸」『長江文学』細目―日本統治下上海の邦語文芸雑誌一斑―」（『奈良大学紀要』四〇号、二〇一一・三）は、「大陸新報」の「土曜文芸」第二三回（一九四一・三・一）と二四回（同・三・八）に作品を寄せた人物名として「大木雷作」と記しており、「雷作」・「雷作」のいずれが正確であるかについては他の資料も出てこない現状では判断しかねている。

(13) たとえば「光ある濁流」が「時子」を「落付いた感じのせいか、年よりは一つくらい多く見える。晴素^{マヤ}しい美人とは云へないかも知れないが、均斉のとれた、上背のある、堂々^{マヤ}たる体格で、肉付きのいいピチ^{マヤ}とした所は本当に健康美と云ふ感じだつた。丸顔の、額の広いどちらかと云へば大柄な顔には、或る理智的な緊張つた感じが漂つてゐて、それが態度の淑やかさとマッチして非常に高^{マヤ}ハインテリヂヤンスを思はせた」というように描写するのと、「建設」が「冬子」に対して「落付いた感じのせいか、年よりは一つくらい多く見える。美人とは云へないかも知れないが、肉付のいいピチ^{マヤ}とした堂々たる体格で、健康美と云ふ感じだつた。丸顔の、額の広い顔には、理智的な緊張つた感じが漂つてゐて大きな眼が美しかつた」といった描写を行っている点を比べてみてほしい。ひよつとして大木雷（富作と国見由紀夫は同一人ではないかと思われるほど女性造形は酷似——それほどステロタイプ化されている、ということだが——している。

(14) 「獵人」は「医王山」とともにのちに短編集『神々のへど』（一九三五・一、山本書店）に収録。

(15) 同座談会出席者は阿部の他には、尾崎士郎・檜崎勤・武田麟太郎・芹澤光治良・舟橋聖一・春山行夫・矢崎弾・田邊茂一。

(16) 一九四〇年八月二七日の「大陸新報」朝刊第四面に「支那の夜 前後編」が二九日に虹口の第二歌舞伎座で一般公開される旨を伝える広告がある。

(17) 木田隆文「長江文学会「土曜文芸」『長江文学』細目―日本統治下上海の邦語文芸雑誌一斑―」（『奈良大学紀要』四〇号、二〇一一・三）。

(18) 同誌の「編輯後記」で「新人」として紹介されている以外、小濱千代子について詳しいことはわからない。なお、この一年後の一九四三年三月、北京で刊行されていた「燕京文学」第一三号に小濱千代子の随筆「忍従と矜持」が発表されたが、同人住所録を見ると小濱の住所は「北京内四区帥府胡同三十二号」となっている。「長江文学」の小濱と同じ人物である確率が高いが、そうだとしたらこの間に小濱千代子は上海から北京へ移動したということになる。

(19) 「えにしあらば」はのち『萩の帖』（一九四三・三、全国書房）に収録。

(20) 「日本統治下上海の文学的グレーゾーン―長江文学会／上海文学研究会の動向から」（池内輝雄・木村一信・竹松良明・土屋忍編『外地』日本語文学への射程』（二〇一四・三、双文社出版）所収。

(21) 犀星の作品がこのように比較的多数の現地文学者のテクストに影を落としていた背景には、現地文学者小泉譲と丹羽文雄、あるいは「燕京文学」同人の大和孝と北園克衛のそのように、何か直接的な関わりや受容のルートといったものがあつたのだろうか。現時点では不明であるので、今後の課題としたい。

(22) この特輯のラインナップは室伏クララの「文化交流」宣伝部の「一室」以下、志奇「日語熱旺盛」日語学校の今昔、藤村敬三「学生日記」学園の性格、保定留夫「ホテル覗き」番頭稼業、高塚土筆「教壇報告」人間道場、国見由紀夫「帰還者報告」南京のある日、春野鶴「婦女会報告」施粥」となっている。

(23) 第十九章「窓」と『繁星』―文学者・室伏クララのために―参照。

(24) 川西政明『昭和文学史』中巻（二〇〇一・九、講談社）中の叙述（四九一ページ）に拠った。

(25) 一九四三年二月一日「大陸新報」朝刊には「阿部、村尾氏前線〇〇到着」という記事が載った。

- (26) 本文中に記されるR夫人の「気位の高い」性格と、「心の花」（一九四〇・七）の「富岡ふゆの追悼録」に掲載された「原稿を御願ひした方々について」中で松崎啓次が記している劉燦波夫人の人となりとの一致からそのように判断できる。
- (27) 「同文書院」が手がかりになるはずなのだが、H家のモデルについては未詳。現在調査中。

（おおはし たけひこ・関西学院大学文学部教授）